

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 21 日現在

機関番号：32646

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370110

研究課題名(和文) 寮歌の形成過程とその展開に関する研究—変容する音楽文化としての再検討

研究課題名(英文) The study of the process of the emergence and the development of dormitory songs (Ryo-Ka) :Reconsideration of the value as the transformational culture.

研究代表者

下道 郁子 (Shitamichi, Ikuko)

東京音楽大学・音楽学部・准教授

研究者番号：50421110

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：旧制高等学校の寮歌の発生には、ドイツ、フランス、アメリカの国歌の集団歌唱の影響が考察された。この集団歌唱の意義は、当初は儀式や運動試合における機能的、教化的なものであったが、時を経て純粋に音楽的な活動へと発展した。特に大正時代には、学生の西洋音楽の知識や演奏技術が向上し、寮歌の音楽的内容や演奏スタイルも芸術歌曲を指向するようになった。

一方で、今日の寮歌の歌唱スタイルは応援歌風が正統とされる傾向が強く、この現象に関する論争があることも理解された。

研究成果の概要(英文)：Dormitory songs of the old system high schools emerged under the influence of singing national anthems such as Germany, France, and the United States. At the beginning, the meanings of singing dormitory songs were functional and educational at a ceremony and a sports game. As time went by, the singing dormitory songs grew musical activity. In Taisho era, students improved the compositional and performance skills of western music and acquired a special knowledge of western music. As a result, students directed the both musical and singing styles of dormitory songs to those of art music. Today, dormitory songs are sung as fight songs and this singing style tends authentic. This study reveals that the singing style of dormitory songs is controversial in terms of the tradition and the transformation.

研究分野：Music Education

キーワード：寮歌 旧制高等学校 西洋音楽受容 コミュニティソング 音楽教育史 音楽伝承

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は「第一高等学校寮歌の研究-寮歌にみる音楽文化活動の西洋化の過程-」(課題番号 20520133、平成 20 年度～平成 22 年度)及び「七大学をめぐる歌」(社団法人学士会刊『U7』vol.37～48 に連載)の研究成果を背景としている。この成果を受け、寮歌の成立過程を旧制第一高等学校の寮歌第 1 号「花は櫻木(明治 23)」が発生した明治 20 年代から、北海道大学予科の「都ぞ弥生」発表の明治 45 年までに設定し、展開期を大正以降とした。

(2) 上記研究において、寮歌が伝承、伝播する中で、歌詞や音が変容したことが理解された。また、現行の伝承の実際を取材する中で、寮歌祭や後身大学の応援団の歌い方は、成立初期の姿とは大きく変わってしまったと感じた。このような現状を知り、音楽文化における正統性や変容の問題を、寮歌を通して研究することは有意義であると考えた。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、旧制高等学校の寮歌を、特に形成過程と展開という 2 つの段階を設定し、異なる時代的・文化的コンテキストの中で考察することにより、変容する音楽文化としての特質を解明することである。形成過程は寮歌が発生し一応の確立を見た明治 20 年代から 45 年までと設定、特に「生徒が自ら作詞作曲をし、それを定例として継続する」ことを慣習化した過程を明らかにすることである。

(2) 展開期は寮歌の概念が定着し、量質ともに充実した大正期以降とし、旧制高等学校の大衆化、寮歌の学外への伝播、閉校後(戦後)に始まった卒業生や後身大学の学生による伝承といった様々なコンテキストにおける寮歌の性格を逐一明らかにする。そして「壺カラ」という一面的なイメージの寮歌を再検討し、その音楽文化的真価を、近代日本の文化や教育と絡めながら究明していくことである。

## 3. 研究の方法

(1) 文献資料：旧制高校関連をはじめ、当時の社会や文化的背景を知るために必要な史料、寮歌の楽譜、音源資料を収集した。如何に丁寧に記事や文章を拾い、検討するかを重要と考え、史料・文献は、本研究のテーマに添って、逐一検討した。

(2) 取材：研究者自ら寮歌祭等の歌唱活動に参加し、関係者へのインタビューによる情報収集を行い、史料・文献では得られない部分を補完した。また寮歌に縁のある場

所(校舎、歌碑等)での取材や聞き取り調査も行った。活動は映像と音に記録して保存し、音楽に関する分析は、徹底して行った。

## 4. 研究成果

### (1) 成立過程

#### ドイツ学生歌との関連

国内の研究者からの情報や資料提供により、ドイツ学生歌は学生組合(Studentenverbindung)における伝統儀式の一つとして行われ、現在でも Göttingen を中心に伝承されていることがわかった。これにより海外調査の範囲の特定が進んだ。またワークショップ「国民音楽の比較研究と地域情報学(2014/9/27 京都大学稲盛財団記念館)」に参加し、明治期に旧制高校で歌われたドイツ国歌に関する情報や研究者との交流の機会を得た。

#### 第一高等中学校の新資料発見

東京大学駒場博物館の学芸員により、明治 22-23 年度の『第一高等中学校一覧』の中に、予科第二級の科目として「唱歌」が指定され、さらに添付資料として「予科第二級唱歌授業」という和紙が発見され、当時の唱歌の授業内容が明らかになった。この和紙には『小学唱歌集(1882-4)』『中学唱歌集(1889)』に掲載の曲のタイトルと、音程と拍子に関する解説や演習、発想記号や聴音法の大意等の教授内容が書かれていた。

#### 国歌、愛国歌

第一高等中学校では、唱歌の授業の他にも、外国の国歌や愛国歌を原語で歌ったことが史料から散見された。また、第五高等学校の『寮歌集(1908)』の「序」で、ドイツ学生歌の愛国歌家のアルント(E. Arndt, 1769-1860)を崇拜する文が確認できた。以上のことより、寮歌の発生には、唱歌や軍歌に加えて、愛国歌が重要な役割を果たしていることが理解された。

### (2) 展開期

#### 明治時代の寮歌批判

明治 37 年『嶽水会雑誌』、明治 38 年『北辰會雑誌』、明治 42 年『六稜』等で、寮歌の歌詞と旋律の不一致や曲想の在り方についての論争記事が確認された。唱歌や軍歌に対して批判的で、専門の唱歌作曲家の作風も批判、洋楽スタイルの曲は日本語に合わないという批判がなされていた。これらの反省を受け、明治末期には新しいタイプの歌の創出が望まれていた。

#### 寮歌作曲家と作詞家のその後の活躍

「紅もゆる」の作詞者澤村胡夷と「嗚呼玉杯」の作曲者楠正一について調査した。澤村胡夷は美学者となったが、詩人として

も活躍、台湾警察歌の制定に関わっていた。楠正一は退学後、音楽活動から身を引いていたが、秋田出身の音楽家として郷土史に名を残していた。同郷の作曲家成田為三や秋田の県民歌に関して調査したが、特に関連は発見できなかった

#### 大正時代の寮歌の種類と特徴

大正7年の高等学校令により、明治時代のナンバースクールとは教育理念を異にする地名スクールが設置されると、寮歌の活動や音楽スタイルも大きな展開期を迎え、以下の種類と特徴が考察された。

- ・ リート調：より洗練された洋楽スタイル
- ・ 歌謡曲調：哀愁、口ずさみ易さ
- ・ プロレタリア調：労働歌風の勇ましさ

#### 旧制松本高等学校寮歌

最初の地名スクールである旧制松本高等学校の寮歌活動を調査した。明治時代とは異なり、寮歌作曲家の学生や、それを歌う学生達の音楽的な環境が西洋化したこともあり、寮歌の活動が、集団士気の高揚や校風の創成から、芸術活動へと変化していた。

#### 寮歌作曲家濱徳太郎の西洋音楽受容

旧制松本高等学校の代表的な寮歌「春寂寥」を作曲した濱徳太郎の調査を行った。契機は、彼の遺族から旧制高等学校記念館に、彼が収集した音楽関連資料が寄付され、その分析を依頼されたことであった。分析の結果、収集楽譜は自筆写譜が半数強を占めていた。内容はピアノ独奏と歌曲で、山田耕筰等日本の作曲家のものも多かった。明治時代の寮歌調とは異なる、哀愁をおびた芸術歌曲風の寮歌「春寂寥」の出現には、当時の日本人としては最先端の西洋音楽の知識や技術を持っていた寮歌作曲学生濱徳太郎の西洋音楽受容の影響が明らかとなった。

#### (3) 伝承の問題

一高玉杯会主催の春・秋の寮歌祭(2014、2015、2016、東大駒場)全国旧制高校寮歌祭(2014、2015)の取材で、参加者の世代交代が明らかとなった。高齢の卒業生の減少に対し、中高年層の参加者が増加し、また孫の世代である10代の参加者が登場した。

今日の寮歌祭や寮歌の活動は、「歌を歌い継ぐ」ことのみが目的ではなく、戦前の日本の高等教育の教育理念を、次世代に伝えるという目的があることが考察された。この成果は、「A study of the Ryo-ka (the Japanese dormitory songs) festivals in Japan. -Aged gentlemen sing their youth and school days」というタイトルで、2014年7月に香港教育大学で開催された国際学会で発表した。

旧制松本高等学校の寮歌に関して、「第20回夏期教育セミナー」の「寮歌の時間」で寮歌愛好家、旧制松本高校後身校である信州大学卒業生、地元の男声合唱団による歌唱実践の比較を行った。その結果、歌唱スタイルに顕著な相違があり、寮歌を歌う意味が歌唱集団によって異なることが考察された。さらに、学生歌、愛唱歌、地域のコミュニティソング、式歌、芸術歌曲と、歌のジャンルが伝承により変容したことが考察された。

#### (4) 国際的な視点

近年、音楽を軸としたコミュニティに関して、国際的な研究や活動が盛んになっている。よって、当初の計画にはなかったが、寮歌を歌うコミュニティの形成に着目して研究を行った。その結果、愛好家が研究を始めたり、研究者が結果的に愛好家となるという、ユニークなコミュニティ形成が考察された。この成果は2015年7月にエジンバラで開催された国際学会で、「The study of the college song activities as the synergies between practitioners and researchers in Japan」というタイトルで発表した。

#### (5) 新たな知見

寮歌の歌唱スタイルの正統性に関して、当初の計画にはなかった大きな知見を得た。現行の寮歌活動においては幾つかの流派がある。バンカラ風、芸術歌曲風、式歌風歌唱であり、正統性が論争の的となっている。一般にバンカラ風に歌うのが寮歌スタイルの正統性と思われているが、今回の研究で、時代、学校、曲ごとに、歌うスタイルは様々であることが考察された。作曲家の目指したスタイルは芸術歌曲の場合もあり、寮歌が一律にバンカラ風に歌われるようになった伝承過程や、芸術歌曲として歌う場合の練習等、寮歌の伝承における様々な今日的な問題が浮き彫りになり、今後の研究の重要な課題となった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1 下道郁子、「旧制高等学校寮歌にみる音楽文化」、旧制高校記念館『第20回夏期教育セミナー』、2017年発行予定、4-32頁(予定)、査読無し

2 下道郁子、「寮歌作曲家濱徳太郎の西洋音楽受容の諸相-旧制松本高等学校及び音楽関連収集史料からの考察-」、東京音楽大学『研究紀要』第40号、2017年、55-74頁、査読

無し

3 坂田修一、田村江莉香、矢嶋未来、下道郁子、福田裕美「成田為三と郷土-『秋田県民歌』と『秋田おばこ』の考察から」『全日本音楽教育研究会 大学部会会誌』、2014年、41-47頁、査読無し

〔学会発表〕(計 6 件)

1 下道郁子「歌唱スタイルとジャンルの歴史の変容」音楽教育史学会、2017年5月13日、日本女子大学(東京・文京区)

2 Ikuko Shitamich、”The study of the college song activities as the synergies between practitioners and researchers in Japan”、Community Music Activity (CMA) International Seminar、2016年7月20日、エジンバラ(イギリス)

3 下道郁子、「旧制高等学校にみる音楽文化」第20回夏期教育セミナー(招待講演)、2015年8月22日、旧制高等学校記念館(長野・松本)

4 Ikuko Shitamich、”A study of the Ryo-ka (the Japanese dormitory songs) festivals in Japan. -Aged gentlemen sing their youth and school days”、APSMER 2015 10th Asia-Pacific symposium on Music Education Research、2015年7月12日、香港(中国)

5 下道郁子、「近代化における歌の役割」、日本音楽教育学会、2014年10月24日、聖心女子大学(東京・渋谷区)

6 坂田修一、田村江莉香、矢嶋未来、下道郁子、福田裕美「成田為三と郷土-『秋田県民歌』と『秋田おばこ』の考察から」、全日本音楽教育研究会大学部会、2014年10月18日、東京音楽大学(東京・豊島区)

7 下道郁子、「寮歌形成過程からみる諸外国からの影響」、音楽教育史学会、2014年5月10日、日本女子大学(東京・文京区)

〔図書〕(計 1 件)

1 『日本のうた』(佐野靖・杉本和寛編)、東洋館出版、2016年3月15日、下道郁子、第二章「うたのルーツや社会性にせまる～近代日本の展開のなかで～」〈社会をうたった一高寮歌 執筆、108-135頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1) 研究代表者  
下道 郁子 (SHITAMICHI, Ikuko)  
東京音楽大学 音楽学部・准教授  
研究者番号：50421110

(2) 研究分担者  
( )

研究者番号：

(3) 連携研究者  
( )

研究者番号：

(4) 研究協力者  
( )